

「冬大根の収穫」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーション研究所 研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

大抵の学校では、低学年(1・2年生)の教室前には「花壇」があるだろう。本校では1階にあるのは1年教室だけで、やはりその前に1年生専用の花壇がある。「花壇」といっても、花の栽培だけでなく、野菜や「つる植物」を植えても良い。春から秋にかけては、ミニトマト、ナス、ヘチマ、キュウリ、スイカ、トウモロコシなど、さまざまな作物が植えられていた。晩秋になるとすべて枯れてしまったが、冬でも育つ野菜を植えたクラスもあった。



東京の冬は、雪こそほとんど降らないが、気温が低く日射も弱いので、野菜の成長は非常に遅い。しかし虫が全くつかないので、無農薬でも葉が喰われない。



この日は「大根」の収穫を行っていた。大根といっても根は細く、まさに春の七草の一つの「すずしろ」という姿である。



それでも、根の部分は白く、そこに「ひげ根」もついている。一応大根の体を成してはいるが、弱い日射と低温で、葉が育つだけで精一杯なのだろう。



面白いと思ったのは、異常に大きい「ふた葉」である。子どもたちも、葉の形が2種類あることに気づいていた。弱い日射で効率よく養分を作り出すために、本来はすぐに脱落するふた葉でも光合成を行い、少しでも成長の助けにしているのかも知れない。



コマツナもよく育っていて、そろそろ収穫できそうだ。晴れた節分の日、自分たちと同じように成長した大根をもらって、とても嬉しそうだった。